



## 民族と宗教を学ぶ

### ウォーミングアップ！

「●民族と言語」の設問1で取り上げる語族とは、世界の言語を系統分類する単位で、同一の祖語あるいは共通基語から分化したと言語学的に認定される諸言語のまとめ、比喩的には言語の家族のことをいう（浮田，2004）。設問1（1）では作業を通じて、世界における語族の分布を概観させる。設問1（2）では、語族のなかでも最も研究が進み、語族を構成する諸言語間の系統関係が明らかになっているインド・ヨーロッパ語族について「なぜ、同じ語族でありながら多様な言語集団に分化するのか、しかも、集団の居住地と国家の領域（言語名と国家名）がおおよそ一致するのか」という問いを生徒とともに考えたい。これは、ヨーロッパにおいて、それぞれの言語が単に文化として継承されてきただけでなく、民族が集団としての結びつきを強固にする道具として機能してきたことに起因する。

第一次世界大戦後、アメリカ合衆国の大統領ウィルソンが提唱した「民族自決」の原則にならい、民族集団自身が国家を確保する機会が世界中にもたらされた。その結果、ヨーロッパでも長く他民族に支配されてきた民族集団の間に独立の気運が高まった。とくに、スラブ系の言語集団が多く住む東ヨーロッパでは、20世紀初めまでドイツ帝国やハプスブルク帝国、ロシア帝国、オスマン帝国という多民族国家に支配されてきた歴史があったことから、19世紀以降、自言語をよりどころにした民族集団が生まれ出され、彼ら自身の権利や安全を確保するための政治的活動が活発に行われてきた。その結果、東ヨーロッパにおいてポーランド、チェコ、スロバキア、旧ユーゴスラビアのスロベニアやクロアチア、セルビアなど言語学的に類縁関係にある言語でさえもが、それぞれ異なる民族集団の母語として主張された。まさに、固有の言語が、集団の文化やアイデンティティを共有する装置となり、国家形成の礎となったのである（加賀美・川手・久邇，2010）。

設問2では、世界の公用語の分布から、言語と国家について考察させる。世界には1国家1公用語の国が多いこと、また、アジアやアフリカ、ラテンアメリカの旧植民地では、旧宗主国の言語が公用語として使用されたり、多数派の民族の言語が使用されていたりすること

のほか、ベルギーやスイス、カナダのように複数の公用語を設定する国があることにも気づかせたい。

複数の公用語を設定する国として、例えばベルギーについてみると、北部のフラマン語地域と南部のワロン語地域がそれぞれ独自の文化や社会をもち、住民にはそれぞれの地域への強い帰属意識があることから両地域ともに古くから自治を求めてきた。1993年に、連邦制に移行して一応の解決をみたが、それぞれの地域が言語集団や民族集団によって区分されることから、連邦制が国家解体をもたらす危険性もささやかれている（加賀美・川手・久邇，2010）。設問1（2）で解説したように、ここ100年ほどの間に言語集団や民族集団を母体とした国家づくりが急速に進んだヨーロッパにあって、特定の言語集団や民族集団が独立して新しい国家を構築するという事態が、いつ起きても何ら不思議ではない。

### ステップアップ！

日本に暮らしていると、宗教について深く考える機会は少ない。しかし、世界には人々の多くが宗教と深いかわりをもちながら生活している地域が存在する。世界の宗教を通じて「異文化を理解し、異文化に学ぶ」という地理の醍醐味を生徒に味わわせたい。

「●世界の宗教」設問3では、世界の宗教について、その起源と伝播、分布を軸に概説する。世界各地で信仰される宗教は、世界宗教と民族宗教に大別される。設問3（1）では作業をもとに、世界宗教は三大宗教であるキリスト教、イスラーム、仏教のように広い地域で信仰され、複数の民族に受け入れられている一方で、民族宗教はヒンドゥー教やユダヤ教などのように特定の国や民族に信者が限定されていることを理解させる。また、設問3（2）では、世界宗教の伝播について、図3を参照しながらそれぞれ理解させる。具体的には、キリスト教はユダヤ教を基礎とし、イエスによって始められた宗教で、ヨーロッパから南北アメリカに、イスラームは7世紀に預言者ムハンマドによって始められ、北アフリカから西アジア、東南アジアに、仏教は紀元前5世紀頃インドでガウタマ=シッダールタ（ブッダ）がおこし、その後、東アジアや東南アジアに広まったことを概説する。さらに、設問3（3）では、おもな宗教の地域別人口から宗教名（宗派名）を考察させる。それぞれの宗教がおもに

どのような地域でどれくらいの人々に信仰されているのか把握させたい。

### ジャンプアップ!

「●生活と宗教」の設問5(2)(3)では、イスラームに焦点化して、ムスリムの日常生活について紹介したい。ムスリムになると、預言者ムハンマドが唯一神アッラーから授かった『コーラン』と、ムハンマドの言行録『ハディース』を指針に生きていくことになる。例えば、ムスリムの基本的な行いとして、五行(信仰告白・礼拝・喜捨・断食・聖地メッカへの大巡礼)がある。ムスリムにとって、食の禁忌の代表は豚肉と酒であり〔設問5(1)〕、一般的に、ハラールとよばれるイスラームの教えで許された食べ物しか口にしないことは広く知られている〔設問5(2)〕。

ムスリムの五行の一つにラマダンがある。日本では断食月と訳される場合が多く、そのことを知っている生徒はいるものの、正しく理解している者は少ない。

内藤(2009)は、「ラマダンはムスリムにとって一年で一番楽しい一か月である」と説明する。ラマダンは、イスラーム暦でいう第9月のことをさし、飲食を禁止するという限定的な意味ではなく、「すべての欲望を断て」という齋戒の意味だという。ただし、齋戒を守るのは、日の出から日の入りまでの間だけである。『『コーラン』には「日が暮れたら食べても飲んでもいいし、性的関係も楽しみなさい」と記載されている。夕方になり、日が暮れると、モスクから礼拝の時間を伝えるための呼びかけ「アザーン」が流れる。日没直後の「アザーン」が聞こえると、ムスリムたちは普段より肉料理の多いごちそうを食べることが許される。ラマダンの期間の夕食は「イフタル」とよばれ、家族そろって食卓を囲むのが通例である。一日の齋戒を守れたことを神に感謝しつつ、家族の絆を深め合うのである。しかし、事情があって家族と離れていたり、家族がいなかったりする人たちのために、イスラーム圏の国々では、ラマダンの間は、街中に仮設のテントが並び、貧しい人たちも、アッラーの客「ドゥユーフツラフマーン」としてそこに集まって皆で食事をする。もちろん食事は無料で振る舞われるうえ、食べ放題である。まさに、イスラームに根づく「喜捨」や「施し」の文化を象徴するものといえる(内田・中田, 2014)。ラマダンの時期になると、イスラーム圏の国のあちこちで、夜の間、遊園地が開かれるなど、楽しいイベントが目白押しとなる。ムスリムたちが、一年のうちで、この月を最も楽しみにしているという理由も頷ける。

またラマダンについて、『コーラン』には、「妊娠中の

人、病気の人、旅行中の人には断食しなくてよい。病気の人には病気が治ってすればよいし、断食できるのにしなかった場合、貧しい人に食べ物を施しなさい」と記されている。アッラーは人間に対して絶対的な命令者というだけでなく、人間が無理をしているときには、寛大な姿勢を示す人格者であり、イスラームは実に人間的な配慮がなされた宗教なのである(内藤, 2009)。

生徒たちは一般的に、イスラームは非寛容で戒律が厳しいという偏った見方をしがちであるが、ラマダンを介してみても、それとは対極にある宗教であると説明できるのである。

イスラームにとって、ラマダン明けの祭りとならんで大きな祭りの一つが、犠牲祭である〔設問5(3)〕。ムスリムはイスラーム暦第12月の巡礼月に、五行の一つである聖地メッカへの大巡礼を行う。世界各地から集まった巡礼者は、縫い目のない白い布をまとい、身を清めてメッカへ行き、カーバ神殿の周りを回るなどの定められた行いをこなしていく。そして、最終日、無事に巡礼が終わったことへの感謝の意を表して生贄をささげる。これにあやかり、同じ日にメッカへ巡礼に赴けなかった世界各地のムスリムたちも、それぞれの家や地域で生贄をアッラーにささげる(内澤, 2007)。生贄になった羊の肉などの食事は大皿に盛られ、貧富や身分の差に関係なくそれを囲むムスリム皆で分け合って食べる(写真2)。

犠牲祭に限った話でなく、普段からイスラーム圏の人々は、水は回し飲みをするし煙草も皆で楽しむ。茶を自分で注いで飲むことはなく、つぐ人間が皆のところを回る。こうしたイスラーム世界に根づく「共有する文化」は、現在の日本では少しずつ薄らいできているのかもしれない(内田・中田, 2014)。

以上のように、イスラームを例に、生活と密接に結びついた宗教のありようを考えることで、昨今のISIL(イスラム国)の存在や、過激派組織などによるテロや銃撃のニュースなどを耳にし、「イスラーム=恐怖・脅威」ととらえてしまっている生徒たちの誤解を少しずつでも解いていければと思う。

### 参考文献

- ・浮田典良(2004)『最新地理学用語辞典[改訂版]』原書房
- ・内澤句子(2007)『世界屠畜紀行』解放出版社
- ・内田樹・中田考(2014)『一神教と国家 イスラーム、キリスト教、ユダヤ教』集英社
- ・加賀美雅弘・川手圭一・久邇良子(2010)『ヨーロッパ学への招待—地理・歴史・政治からみたヨーロッパ』学文社
- ・内藤正典(2009)『45分でわかる!イスラムの真実と世界平和。イスラムへの誤解が、世界を不安にさせている。』マガジンハウス